

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：14701

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13573

研究課題名(和文)「自立活動」における音楽療法的活動の理論構築を目指した実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Study to Construct a Theory of Music Therapy Activities in self-reliance activities (jiritsu katsudou)

研究代表者

上野 智子 (UENO, Tomoko)

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：80583939

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は「自立活動」における音楽療法的活動の理論的枠組みの構築を目指すうえで、次の3点を明らかにした。第1に、特別支援学校を対象にした「自立活動」に関する実態調査の分析を行い、音楽づくりや即興表現活動の充実や研修機会の必要性が明らかになった。第2に、現職教員・大学院生・大学教員の協働で実施した特別支援学校小学部での「自立活動」を通して、教員に求められる知識や技能の一端を明らかにした。第3に、中学校特別支援学級の卒業生を対象にインタビュー調査を実施し、「自立活動」での即興表現に対する印象や、教科学習とは異なる音楽活動に対する学習者の認識の一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は「自立活動」における音楽療法的活動が、心身のリラックスおよび自己表現の場になっており、教科学習とは異なる音楽経験の場として機能していることがインタビュー調査より明らかになった。その一方で、「自立活動」の授業実践において音楽療法的活動を実施するためには、音楽療法理論を基盤とした音楽を用いることの根拠や、実際に音楽活動する際の音や音楽の扱い方や楽器の選択といった暗黙知の共有化・一般化の必要性が明らかになった。これに関わり、即興的な音楽表現や創作活動のための研修機会の充実を指摘した。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the following three points in aiming to construct a theoretical framework for music therapy activities in "self-reliance activities (jiritsu katsudou)". First, an analysis of a survey on "self-reliance activities" conducted at special-needs schools revealed the need for enhanced music-making and improvisational expression activities, as well as training opportunities. Second, we clarified some of the knowledge and skills required of teachers through "self-reliance activities" at elementary schools for special-needs children, which were conducted jointly by in-service teachers, graduate students, and university teachers. Third, an interview survey was conducted with graduates of a junior high school special-needs class to clarify their impressions of improvisational expression in "self-reliance activities" and some of their perceptions of music activities that are different from academic studies.

研究分野：音楽教育

キーワード：音楽療法的活動 音楽療法 自立活動 音楽教育 特別支援教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「自立活動」とは、特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室に通う児童生徒を対象に、障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とした特別の指導領域として、心身の調和的発達の基盤を培うものであり、特別支援教育の要として位置付けられている。この「自立活動」の内容と音楽療法で用いられる音楽の機能や音楽療法実践の目的には共通性がある。このことについては、既に先行研究においても指摘されており、共通性に着目した先行事例も確認できる。

申請者もまた、中学校特別支援学級の「自立活動」において、音楽療法そのものではなく、音楽療法の考え方や技法を援用した音楽療法的活動を実践してきた。活動を通じて音楽療法的活動に通底する観点として、流動的な関係性、個人のありのままの表現の尊重、個人の承認の3点を抽出した。ただし、この3観点は音楽の機能を駆使するための知識・技能ではなく、児童生徒や教師が参加可能な活動を成立させるための理念であり、「自立活動」において音楽療法的活動を実践するためには、活動を成立させる構造やメカニズム全体を俯瞰する理論の構築が必要である。

2. 研究の目的

本研究の学術的「問い」は、「『自立活動』における音楽療法的活動は、音楽や音楽療法の専門性をもつ者ともたない者との協働の中で、どのような原理と方法によって成立可能になるのか」とした。この問いから本研究では、「自立活動」における音楽療法的活動を実証的に検討することで、活動を成立させるための要因の解明と理論的枠組みの構築を目指した。

3. 研究の方法

本研究は、(1)特別支援学校小学部における現職教員・大学院生・大学教員の協働による「自立活動」の実施と検討、(2)特別支援学校を対象にした「自立活動」に関する実態調査の分析、(3)中学校特別支援学級の卒業生を対象にした「自立活動」のインタビュー調査の分析と検討の3つの柱から成る。

(1)では、附属特別支援学校小学部において大学教員、大学院生(現職教員)、附属特別支援学校教員が協働しながら、音楽を活用した「自立活動」の授業づくりを実施・検討した。本取り組みでは、音楽療法の知識や技能を有する大学教員、音楽の専門的な知識・技能を有する現職教員、音楽が専門ではない現職教員が協働しながら授業づくりを行い、授業の実施とその後のカンファレンスを通してそれぞれの立場から「自立活動」において音楽を用いることや音楽療法の視点を取り入れることについて意見交換を行った。

(2)では、「インクルーシブ教育システム構築のための「自立活動」における音楽カリキュラム開発」(研究課題/領域番号:16K17445)において2019年にA県内の特別支援学校(視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱)を対象に実施したアンケート調査結果を用いて、音楽科と音楽を活用した「自立活動」の実態と、両者の共通点・相違点を解明することを目的に分析を行った。その際、以下の5つの観点から7項目について分析を行った:属性(項目)、音楽活動の具体(項目)、授業づくりの課題(項目)、音楽療法や音楽療法の考え方を取り入れた活動の目的(項目)、音楽科及び音楽を活用した「自立活動」の機能や意義(項目)。

(3)では、中学校特別支援学級の「自立活動」で音楽療法的活動を経験した卒業生を対象にインタビューを実施し、その発言から彼らの考える「自立活動」での音楽活動の印象や、教科学習との違いについて分析した。

4. 研究成果

(1)特別支援学校小学部における現職教員・大学院生・大学教員の協働による「自立活動」の実施と検討

研究期間中、毎年授業実践と検討を実施した。授業後のカンファレンスでは、音楽を活用することで、児童たちは運動機能(微細運動・粗大運動)、感覚統合、社会性やコミュニケーション能力等の促進が確認できたほか、音楽があることで活動に自然な流れが生まれ、見通しをもって活動に参加できていた。その一方で、教師たちは、個々の児童の実態把握を起点に自立活動の内容を考案するにあたって、音楽を活用する際の根拠を見い出すことや、音楽を通じた児童との即興的な関わり方に戸惑いを感じたり、音楽の知識・技能面にハードルを感じたりする場面がみられた。このことは、音楽活動する際の音や音楽の扱い方や楽器の選択、児童との音を介したかわり方等について、音楽療法の理論や考え方、実践方法を基盤とした暗黙知の共有化・一般化の必要性が示されたといえる。

(2)特別支援学校を対象にした「自立活動」に関する実態調査の分析

特別支援学校における音楽科および音楽を活用した「自立活動」では、自己表現の促進を大切にしているという点において共通していた。ただし、音楽科では、芸術文化に触れることや音楽を通して生活を豊かにするといった教科としての目的や意義が、そして音楽を活用した「自立活動」では、児童・生徒の実態に即した音楽の機能の活用が重視されていた。このように両者は、共通点があるものの明らかに異なるものとして認識されていた。しかしながら、「音楽づくり」の実施率の低さや、音楽のジャンルや楽器に偏り、授業の構想や指導方法および音楽の活用に関する情報の不足、そして部屋の不足をはじめとした教育環境上の問題といった課題も明らかになった。

(3) 中学校特別支援学級の卒業生を対象にした「自立活動」のインタビュー調査の分析と検討
本調査では、「自立活動」における音楽療法的活動が、心身のリラックスおよび自己表現の場になっており、教科学習とは異なる音楽経験の場として機能していることがインタビュー調査より明らかになった。特にイマジネーションの中で生徒独自の感性が尊重される即興表現は、プレッシャーの少ない楽しい活動だったようである。本調査から、音楽することを通して、参加者すべてを承認し、誰も排除されない、すべての参加者を含みこむインクルーシブな活動を志向する場が学校の中にあることの意義が示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 上野智子、竹澤大史、近藤親子、菅 道子	4. 巻 7
2. 論文標題 特別支援学校における音楽科および音楽を活用した「自立活動」に関する実態調査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 和歌山大学教職大学院紀要：学校教育実践研究	6. 最初と最後の頁 pp.39-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19002/AA12779311.7.39	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Tomoko Ueno, Michiko Kan and Yukari Yamazaki	4. 巻 Volume 66, Issue 4AB
2. 論文標題 A MUSICAL DRAMA BASED ON FOLK TALES BY JUNIOR HIGH SCHOOL SPECIAL NEEDS STUDENTS	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 HNUE Journal of Science - Educational Sciences,	6. 最初と最後の頁 27-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18173/2354-1075.2021-0057	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 上野 智子、菅 道子、山崎 由可里、小林 史、武内 藍、向井 直樹、藪本 安有美、上山 佳子、宮本 公美、竹中 茉李、島田 裕代、鈴木 美紀、中弥 佳央里、平川 雅之、森 直美、山崎 琴音	4. 巻 2021
2. 論文標題 特別支援学校小学部「自立活動」における音楽的アプローチの有効性：“ピーチ姫をたすけよう!!”を題材として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書	6. 最初と最後の頁 77-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19002/wadaikzsh.2021.77	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 上野 智子、菅道子、山崎由可里、小林史、奥野 浩二、武内 藍、藪本 安有美、岡本 洋平、山本 享代、大植 祥子、沢村 紀一、谷口 拓、中尾 久美子、畑中 英里、森下 由紀子、山崎 海央	4. 巻 2022
2. 論文標題 音楽の活用による、身体機能を高め他者との交流を図る自立活動の試み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書	6. 最初と最後の頁 27～32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19002/wadaikzsh.2022.27	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上野 智子、菅 道子、山崎 由可里、北岡 大輔、小林 史、西本 一史、藪本 安有美、廣重 拓野、竹内 友紀、入學 遼治、宮本 裕也、山本 真史、柿本 祐子、新家 一輝、橋本 晃和、藤岡 俊普、森田 朱里、山口 紗也	4. 巻 2023
2. 論文標題 音楽の活用による、身体機能を高め他者との交流を図る自立活動の試み	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書	6. 最初と最後の頁 13～18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19002/wadaikzsh.2023.13	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 笹野恵理子・学校音楽文化研究会編著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 368
3. 書名 学校音楽文化論：人・モノ・制度の諸相からコンテキストを探る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------